SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

金融トピックス（９８／５）

銀行３月期決算出揃う

先週から今週にかけて大手銀行を始めとする銀行の決算が発表された。新聞等で詳しく報じられているので改めて言及するまでもないが、前期銀行決算を見て思ったことを幾つか書いてみる。

一、多くの銀行が日銀に手元資金を積み上げているが、これは流動性リスクを考えているからで、依然として昨年１１月の悪夢から醒めていないことを示している。

二、多くの銀行で「含み」が底をついた。過去の遺産を食い潰してしまった訳で、今後はフローの収益で処理して行かねばならなくなった。信用リスクを貸出金利に転化する（金利の引上げ）動きが強まるであろう。

三、新基準（従来基準に３ヶ月以上延滞債権や条件緩和債権を加えたもの）による不良債権総額は、従来基準より約４０％増加しているが増加率にはばらつきがある。概して堅実度の高い銀行ほど増加率は大きいようだが、……（この先は言わない）。

四、不良債権処理の峠は超した。そう言いつづけて何年か経ったが、全銀行とまで言えないが今度ばかりはそう受取っていいと思う。その結果が天文学的赤字額の計上で、中小企業にとっては実感の湧かない唖然とする数字が並んでいた。

五、相談役の定年制とか常任顧問の設置とかくだらないことに知恵を絞っている姿を見るとウンザリする。あなたの銀行は何が強くて、何が売り物なんですか？そう問われる時代が来ているというのに！

長期金利、更に低下

国債指標銘柄（１８２回債、表面金利３％、残存期間約７年）が過去最低金利を更新し、１．１％台に突入した。

この世界近代史上初めて経験する低金利が一体何を意味するのかを正確に指摘するのは難しい。判っているのは、この低金利国債を買っている投資家がいるということだ。そして、その投資家はそれで採算が合うと考えていることだ。

このことは、設備投資や在庫投資しても利益が出ないこと、即ち日本経済が富を生み出す能力を低下させていることを表している。だがそれだけだろうか？

それだけではないような不気味さを感じる。急速に進む円安下の金利低下、残念ながらこの現実を前にただ首を傾げるばかりである。

日銀決算と「円安」

今週、日銀の決算が公表された。案の定、揺れる金融システムを表す決算であった。バランスシートは１．５倍に膨れ上がり、増加した資産（短期金融市場への資金投入と日銀特融が主因）の質的悪化が指摘されている。

特に無担保日銀特融（残高約３兆円）に対する償却準備金の積立率を変えた（従来２５％を今回より１０％とした）ことが思惑を呼んでいる。日銀は色々説明しているようだが、赤字転落を回避したとの見方も根強い。日銀のバランスシート悪化は、即ち「円安」要因であると認識すべきであろう。

３度目の破綻

２年前に破綻した兵庫銀行を引き継いだみどり銀行が経営に行き詰まって、阪神銀行に吸収合併されることとなった。

この銀行の破綻は事実上３度目の破綻である。９３年、９５年、そして今年と。この事実は何を表しているのか？色々な理解の仕方があると思うが、失敗を取り繕うビボウ策は通用しないということだ。

吸収する阪神銀行の思惑が何処にあるかは知らないが、願わくば４度目の破綻が起らないように祈りたい。

横行する「システム金融」

システム金融という聞きなれない金融が横行しているという。月利５０％という暴利を貪る悪徳金融とのことであるが、昨年来急速に広がり始めているようだ。ＴＶ報道を見ていたら、何の証拠も残さないプロ金融の手口が特徴で、９ヶ月で５０万円の借入が何と７，０００万円以上に膨れ上がるという。

こうした金融がはびこる素地はどこにあるのだろうか。単に金融に無知であるからなのか、それとも事業継続の断念やその処理がつらくて恐いからなのか？

金融にたずさわる者として、こうしたニュースに接するのは悲しい。

TEL. 0438－53－6092 FAX. 0438－53－6096

E－mail smc_toyo@hi-ho. ne. jp